百花逍遥

倦鳥主宰　選・評

（講評）

剪定にテンガロンハットちょうど好し　　善啓

ご承知のようにテンガロンハットには十ガロンの水が入るという、カウボーイの山高帽。それを何故か氏は所有しておられて、強い夏日の下、剪定の際に被るのにはもってこいだとおっしゃる。その童話の主人公のような氏の風体を想像してみるだけで心楽しいではないか。

ふらここや向かうに見える「恋してる」　　弓人

席上「ふらここ」がひとしきり話題になった。鞦韆（しゅうせん）、半仙戯（はんせんぎ）ともいい、早い話がブランコのことである。紀元前に北方の異民族から中国に輸入された故、難しい名前が残っている。

また君に「恋してる」、ビリーバンバンの歌だろうか。取り合わせが良い。

荒木屋のガンモはうまし夏の夕　　河童

夏の夕べの喜びがさらりと表現されており、よく読み手にも気持が伝わってくるのである。荒木屋でも寺田屋でも良い。要は全国津津浦裏で、ほぼ同時刻にガンモを食している御仁が枚挙に暇ないということなのである。

焼き鳥に生きる楽しさなどをいう　　加賀

寝て起きて読みて歩いて握り鮨　　西風

季語は「すし」で夏。一夜漬けの魚にさました米飯を重ねて「圧し」た。魚は夏の間に漬け込んだ。「読みて」と「歩いて」が入っているので救われるのであるが、

一日の行動を羅列して見せることにより滑稽の味を誘った。芭蕉にもある。

「朝顔にわれは飯食う男かな」。無風流の風流である。

遠雷や夫の居ぬ間のイエスタデイ　　和代　③

先人の、季語に対する細やかな想いに頭の下がることがある。掲句の遠雷を含めて「雷」は夏。稲妻、稲光は秋。気象的にはほとんど同時に発生するのであるが。

遠雷は孤閨を思わせどこか淋しい趣。イエスタデイは実人生のそれとビートルズのそれと。原句「居ぬ夜」を「居ぬ間の」と直させて頂いた。時間の幅を持たせ表現の柔らかさを志向した次第である。いかがであろうか。

浅蜊めし庵は右手丁ばかり　　豊　嗣

心にくい仕立てである。いそいそと浅蜊飯を食べに。あと一丁ほどの距離。

弓月におくられ帰る一人旅　　冬　草

弓月は弦月、しかも満月過ぎた降り月であろうか。痩せてゆく月は淋しい。

蓋取れば鳴門若布の香りかな　　智　昭

万葉集にも詠まれた瀬戸は鳴門の若布。薄くしなやか。先ず香りを楽しむ。

路地覚ます三社祭の朝囃子　　マ　サ

さもありなんと想像される。「朝囃子」なる措辞が新鮮である。

朝焼や出撃の遺書に胸裂ける　　信　貴

知覧であろうか。若い特攻隊員の遺書を読むのは辛い。少し直しました。

色いろいろ色の風吹く新樹かな　　晶　子

新樹の美しさは終日眺めていても飽きない。時間とともに風とともに変わる。

雷鳴に飛びつく犬をなだめける　　藤　則

犬は大の雷嫌い。そのたびに沢山の犬たちが鎖を切ってまで逃げ出すという。

暑くても赤子の指令でいそいそと　　満紀子

赤子の指令という言葉が面白い。まるで直接、天の声のように届く。

艶やかに咲きし海棠夢の跡　　靖

柄の長い花が房状に垂れる風情を楊貴妃に例えた人も。何の夢の跡であろう。

山菜はここよここよとカッコウ鳴き　　黄　雀

ここよここよと可愛い口語を使ったのがメルヘン風。まさか氏とは。

サングラス変身のさまに酔ひしれて　　清　龍

ささやかな変身願望を満たす。なのに挨拶されたりして・・。「て止め」で。

悲しきは鮮度の違ふぶり大根　　慶　子

何故鮮度が異なるのか詳らかにされてない点がポイント。何故悲しいのかも。

木下闇ものの気配に急ぎ足　　雅　子

昼間でも木下闇には魑魅魍魎が潜んでいる気配がある。おのずと急ぎ足に。

鱧喰うて太閤嫌ひ変わらざる　　しろう

京都の錦小路は皆さんもちろんご存知であろう。通称錦である。その錦、生きたままの魚があり、とれたての海魚、川魚を売る。無論、くだんの鱧も店先で焼いて売っている。

「駿河の鱧なら喰わへんで。訳ありや」。某京都人のガンコさ一徹さが伺えて面白い一句となった。太閤嫌ひの「の」はない方が一句は引き締ります。

鳥兜の森（兼題　紫陽花）　　雅　子　選・評

（選評）

兼題は「紫陽花」。雨との関連や七変化する花と人生を重ね合わせたもの、空や海との対比で色に焦点をあてたもの、実景を日本画的に美しく詠んだものなどいずれもすばらしい句が勢揃いして圧巻でした。

今年のテーマのハラハラ、ドキドキの句を目指す、また美、毒、滑稽を旨とした鳥兜の部の趣旨をふまえて、次の三句を選ばせていただきました。

梅雨の雨矢田寺の紫陽花でぶっとばせ　　河　童

「ぶっとばせ」のインパクトが強く、衝撃を受けた句。矢田寺は奈良県の広大な矢田自然公園の中にあり、六十種の紫陽花が一万株あるという。その紫陽花で雨を追い払おうという豪快さが、鳥兜の部の最初を飾るものとしてふさわしいと思われる。

紫陽花の白より出でてふしぎ旅　　黄　雀

「白」から七変化するという紫陽花の造化の不思議に感じ入ると同時に、変転しながらより深い境地に至る人の世の生き様をも想わせる。

雨上がり紫陽花色の女心　　晶　子

「雨上がり」が効果的で、時間の経緯とその瞬間の「女心」の微妙な変化が

軽やかに詠まれている。チェーホフの『可愛い女』を連想させる。

（後記）

★リニューアル初の句会報、お届けします。初代「鳥兜」選者の雅子さん、「仕分けぶり」お見事ですね。私のイメージともぴったりで愕きました。選評も銘文で感銘しました。ご主人様にも校閲でお手を煩わせた由。

★来月は満紀子さん。兼題は「サングラス」。一段と楽しい頁にいたしましょう。どうか身の回りを『色眼鏡』で見直して下さい。

★「アルファー会」もスタートしましたが、メニューや中身はご希望次第です。ご意見をお寄せ下さい。なお教材は、今月のものを当分使用する予定です。来月もお忘れなく。

★本句会報の「頁番号」は、右下一行目の〇カッコ数字です。事情あって当分の間こうなりますのでご容赦下さい。

（倦　鳥）